

11：気道の圧ストレスと咳感受性亢進

原 丈介，藤村政樹，明 茂治，上田章人（金沢大学大学院細胞移植学呼吸器内科）

【背景および目的】咳は呼吸器疾患において最も頻度の多い症状の一つである。咳の生体に与える影響を検討するために、吸息反応に続く大きな呼息反応という咳反射を機械的に気道に起こす実験モデルを考案した。すなわち、非感作モルモットの気道に対して機械的に陰圧ストレスを負荷し、気道炎症及び咳感受性の変化を検討した。

【結果】気道への機械的陰圧ストレスによってカプサイシン咳感受性は亢進した。気管支肺胞洗浄液中の総細胞数、細胞分画に変化は認めなかった。

【結語】咳による気道への陰圧ストレスによって、咳感受性の亢進が惹起される可能性が示唆された。咳によりさらに咳が誘発されるという悪循環の存在も示唆された。